

## ■ ジェンダーセッション



## 男らしさ・女らしさを形成する生物学的要因と社会的要因

— 第 29 回ジェンダーセッションの報告と議論 —

豊田 由貴夫 (ジェンダーフォーラム協力委員、立教大学文学部教授)

はじめに

2004 年の 6 月 2 日に、第 29 回のジェンダーセッションとして、「文化人類学とジェンダー」というタイトルで話をした。話の内容は、ジェンダーの基本的な意味を説明し、特に文化人類学との関連で解説をする、という性格のものだった。参加者はそれほど多くなかったのだが、私の話の後に質問と議論が長時間続いた。実はその時には十分議論を深めることができなかった部分もあるので、その後に付け加えるべきだったと考えていることを示したい。

セッションでの講演の内容

セッションで私が話した内容を概観しておこう。

ジェンダーとは「社会的な性」あるいは「社会的な性差」であり、このような「社会的な」という語と対立するのは「生物学的な」という語である。あるいは「身体的な」と言っているかもしれない。この「生物学的な性」はセックスと言われ、これに対立するのがジェンダーである。

このような「社会的な性」であるジェンダーという概念が我々に身近に関連する場合として、「男らしさ・女らしさ」の問題が挙げられる。「男はこうだ」、「女はああだ」、「男はこうすべきだ」、「女はこうしてはいけない」というような男らしさ・女らしさは、実は社会によってかなり異なっている。アメリカや日本のいう男らしさ・女らしさとは全く異なる男らしさ・女らしさを持つ民族の事例も報告されている（実はこれは私が研究しているパプアニューギニアの事例であり、有名な文化人類学者であるマーガレット・ミードの調査によるのだが、現在ではその調査結果の信憑性については議論がある）。

男らしさ・女らしさが社会によって異なるということは、それは社会から男らしさ・女らしさを教育される、ということである。もともと遺伝で決まっているのではなく、社会から教育される、つまりそれらには「作られる」という性格があるのだ。このように社会から習得されるものは「文化」と言ってもよいのだが、文化人類学という学問が貢献した大きな点は、この「文化」の重要性を示したことであり、そして、ジェンダーはきわめて文化人類学的な概念なのである。

そして、ジェンダーという考え方が最近になってよく使われるようになったのは、一つには「生物学的な性」と「社会的な性」を分けて考えた方が、うまく説明できる現象が多いからである。また「生物学的な性」よりも「社会的な性」の方が重要な場面が増えてきていることも理由の一つだ。例えば、性同一性障害は「身体の性」と「心の性」が異なる事例であるが、その治療の場合、少し前ならば「身体」に「心」を合わせるように治療さ

れていたのだが、現在では、「心」に「身体」を合わせる方がより効果的であることがわかっていく。心の性は広い意味でのジェンダーと考えられるので、これはセックスよりもジェンダーの方が重要だと判断されている例になる。さらには、このジェンダーという概念を使うことによって、今まで絶対視されてきた男らしさ・女らしさに対して疑問を持つことができる。ジェンダーが「社会的な」ものであることから、そこには「作られた」という性格があるからである。

ただし、このような考え方に関しては反論が出るかもしれない。男女は生物学的に異なるのだから、つまり身体的に異なるのだから、それが男らしさ・女らしさに影響を与えるのは当然ではないか、そういう反論である。男は逆立ちしても子供は産めないし、赤ん坊に母乳をやるのは女性だけだ。そのように身体が違うので、男らしさ・女らしさが違ってくると考えるのは当然だろう、そういう主張である。

実際、この主張に対する反論は難しい。男女の身体上の違いは明らかであり、それに関連させて男らしさ・女らしさが説明されれば、そこに文化的・社会的要因の入り込む余地は少なくなる。

しかし文化を研究する立場として、これに対して多少の「再反論」をしておこう。第一には、身体上の違いから男らしさ・女らしさが違うというのは、学術的には明確に証明されていない。例えば、女性がいわゆる「母性本能」などというものを生まれつき持っているという主張は、学術的には認められていない。単純に言えば、子供を産むからといって、女性が「やさしく」なるというのは、証明するのは難しいということだ。第二は、たとえ男らしさ・女らしさの形成に対して生物学的な要因が関わるとしても、これまではあまりに生物学的な面が強調されすぎたのではないか、という点だ。例えば、授乳は女性しかできない（これは生物学的に当然）ののだが、それに関連させて育児が女性の仕事とされる（これが生物学的に当然かは難しい）ことに対しては、疑問を持ってもよいだろう、という主張である。文化を重要視する立場から、このような多少の「再反論」ができるだろう。

つまり、ジェンダーという概念を導入すると、男らしさ・女らしさをもう一度考えてみることができる。既に言われている男らしさ・女らしさが、いかに社会的に決められたもののなのか、我々はもう一度考えることができるのである。そして、現代の我々の生活では、社会的な性が生物学的性より重要な場合が多い。そして社会的な条件が変化したこともあり、現代社会では生物学的な差をあまり考える必要性がなくなってきた。例えば男女の筋力の差が職業選択に結びつくことは少ないだろうし、男性が自分では母乳をやることはできなくても、人工乳で育児はできる。

#### セッションの議論

以上のような私の話の後で、生物学の上田恵介先生から、「再々反論」をしたいと、意見が述べられた。上田先生の主張は、男性・女性にはもともと生物学的な差がある、例えば、男の子供は放っておいても機械や乗り物のおもちゃで遊ぶ傾向があるし、女の子はやはり人形で遊ぶような傾向がある、そこには社会的な影響は考えられず、既に差があると考えてよいのではないかという、そのような主張だったと記憶している（上田先生、間違っていたら御免なさい）。

これに対して、参加者の側からも意見が出た。それはジェンダーの考え方に反するもの

だ、という反論が出たような記憶がある。参加者は女性が圧倒的で、実は私のゼミの活発な女子学生が何人かいたので、上田先生の主張に対しても臆することのない意見が出たような記憶が残っている。

この問題に関しては、その後議論が様々な点に拡散したこともあって、参加した人たちの多くも十分議論に納得せずに終わってしまったかもしれない。私も自分が話をした後の議論では多少発言を控えたこともあるので、この場を借りて、多少付け加えておきたいと思う。

#### 男らしさ・女らしさと生物学的要因と社会的要因

問題は、男らしさ・女らしさが形成されるのには、生物学的な要因と社会的な要因のどちらが働くのか、あるいはどちらが強く働くのか、ということになる。前者の問題、つまりどちらが働くのかという問題では、生物学的要因と社会的要因の一方だけを考える人はまずいないであろう。上田先生も社会的な要因が多少作用することは否定していないと思う（ことさら上田先生のお名前を挙げる必要もないのだが、生物学的な要因を重要視する立場の代表として登場してもらっているつもりである）。この点では、私と上田先生の主張はそれほど対立するものではない（と私は考えている）。問題は、どちらが強く働くのかということになり、この点で上田先生と私の主張は対立するのだが、実はこの問題は簡単に決着がつくようなものではない。

最初に私がした話の中で、一つの例を出した。例えば、数学的な能力に関して、男女差があるかを調べてみると、男性の方が成績がよいという結果になる。単なる誤差の範囲内ではなく、統計的に意味のある差になる。これとは逆に、言語的な能力の男女差を調べると、女性の方が成績がよいという結果が出る。このような調査には、試験で能力を明確に測定することができるのか、という問題が常につきまとうのだが、以上のことはかなり一般的に認められている。

このような現象に対する説明としてまず考えられるのは、数学的な能力は男性の方が女性よりも優れている、それは生まれつき決まっている、つまり生物学的に決まっている、という説明だ。反論は難しいのだが、文化を研究する側から少しだけ反論しようとする、以下になるだろう。確かに男性の方が数学の試験では成績が少し高いかもしれない。ただし、そこに社会的な（あるいは文化的な）要因が入り込んでいないか、という反論だ。例えば、男性は、数学ができることを社会から期待されるということはないだろうか、という論理である。男性のくせに数学ができない、と社会から言われることがないだろうか、あるいは女性のくせに数学ができてどうする、と周囲から言われることがないだろうか、ということである。もともと男性は数学ができるのかもしれないが、それに加えて、男性は女性より数学を学ばなければならないような社会的な圧力がかかっているのではないか、ということである。

繰り返しになるのだが、この問題は簡単にわかるものではなく、大問題である。「社会的な」要因を「生物学的な」要因から明確に分離させて考えることはきわめて難しく、事実上不可能といってよい。その意味では、上田先生の主張と私の主張のどちらが正しいのかは判断できないと言ってよいだろう。

しかし、例えば、男性の方が女性よりも数学の平均点が3点くらい高いかもしれないの

だが、そのうち2点は生物学的な差から来ているとして、もしかしたら1点ぐらいは社会の圧力が影響しているのではないか、という可能性を考えてもよいであろう、というのが、文化を重要視する立場からの主張である。

そして実は、私は、数学で男性と女性の平均点に差があったとしても、そのうち生物学的な差から来ているものはせいぜい1点ぐらいで、社会的な圧力による差の方が3点くらいあり、そうだとしたら生物学的な要因を考えなくてもいいのではないかとさえ考えている。もちろん、これは証明できない。そしておそらく上田先生は逆に、社会的な要因による影響はおそらく1点の差が出るほどではなく、差はほとんど生物学的な要因によるものなので、そこに社会的要因を考える必要はないだろう、と考えているのだろう。これも証明するのは難しい。

確認するならば、男らしさ・女らしさの形成に生物学的な要因が関わるのは否定しないのだが、文化的・社会的要因もそれに関わっており（それは生物学的要因の重要性を主張する人も否定はしないだろう）、そしてこれまで考えられてきたよりは、はるかに文化的・社会的要因が強いのではないかと、というのが私の主張である。